

草原がつなぐ人・自然・文化

全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.41 (Jan. 2020)



ススキのテントと細野高原（静岡県東伊豆町／東伊豆町提供）

新年のご挨拶

全国草原再生ネットワーク会長 高橋佳孝

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。皆様におかれましては輝かしい新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。旧年中は、草原再生ネットワークへのご協力を賜り、誠にありがとうございます。

本年の9月27日（日）、28日（月）には、いよいよ「第13回全国草原サミット・シンポジウム」が静岡県東伊豆町で開催されます。昨年8月には実行委員会が立ち上がり、本ネットワークから会長と理事2名が参加しています。12月にはイベントも行われ、地元での理解醸成を進めているところです。久しぶりに東日本での開催となります。皆様お誘い合わせの上、ぜひご参加いただき、大会を盛り上げて下さいますようお願い申し上げます。

全国草原サミットは、第10回記念大会が2014（平成26）年に阿蘇市で開催され、「自治体連携の全国組織の充実」「残したい日本の風景『草原100選』の制定」に取り組むことを14市町村の共同宣言として採択しました。2年後の2016年11月には「全国草原の里市町村連絡協議会」（通称「草原自治体ネット」）が発足し、そして、昨年（2019年）の定時総会において「未来に残したい草原の里100選」の

制定事業を進めていくことが決まりました。

今後は、全国草原サミットの開催ごとに数カ所ずつ、順次選定していくこととなります。まずは、9月28日に東伊豆町で開催される第13回全国草原サミットにおいて、第1回の選定が実現します。

「草原100選」の制定は、未来に向けた草原保全運動のシンボルとして掲げていくものです。風土に根ざした特色ある草原を育み、将来への展望をもったさまざまな人の活動があり、そして、そのような活動を通して人々が交流し合う「里」をイメージしたものとなるでしょう。

ふるさとの原風景でもある草原の認知度は、まだまだ低い状況です。草原100選のような活動を通して、草原の魅力と価値を広く国民に訴えていかなければなりません。当ネットワークとしても、今まで積み上げてきた連携・協力の輪を一層拡大強化しながら、草原100選にも積極的に関わり、全国の草原保全活動を牽引してまいります。

引き続き、会員の皆様のご指導、ご支援を心よりお願い申し上げます。

第13回全国草原サミット・シンポジウムについて

「第13回全国草原サミット・シンポジウム in 東伊豆大会」の日程が、2020年9月27日（日）～28日（月）に決定したことをお伝えしましたが、実行委員会が開催され、本格的な準備が進められていま

す。

このたび第2回実行委員会とイベントが行われましたので、その様子について東伊豆町の担当の方から報告をいただきます。

第13回全国草原サミット・シンポジウム in 東伊豆

第2回実行委員会とイベントについて （岩崎名臣：東伊豆町役場）

2019年11月8日（金）、全国草原サミット・シンポジウム in 東伊豆大会の第2回実行委員会が東伊豆町役場会議室にて開催されました。今回は会議の前に大会当日に現地見学会の会場となる細野高原を

視察しました。視察ではvol.40の表紙に使っていた標高700mから伊豆七島を望む絶景ポイントや静岡県の指定文化財にもなっている芝原湿原等の現地確認を行いました。

現地視察後は、役場会議室にて第2回実行委員会を開催いたしました。今回の会議ではプレイベント、現地見学会についての協議の他、全国草原の里市町

村連絡協議会、全国草原再生ネットワークからの依頼・報告として委員の高橋先生より草原の里100選やネットワークの活動等について説明がありました。



また、12月1日（日）には全国草原サミット・シンポジウム in 東伊豆大会のプレイベントを開催いたしました。

会場は稲取漁港と細野高原の海と山の2会場で、海の会場ではススキを活用した食のイベントを開催し、カツオのたたきやバームクーヘン作りにチャレンジしました。



一方、山の会場では刈ったススキを束ねて、竹の枠組みにそのススキをかけてテントを作る体験を行

い、参加した子供たちはそのテントの中で寝転んだり、楽しそうにしていました。



当日は天候に恵まれ参加した方たちからはたくさん笑顔が見られました。大会当日も天候に恵まれ



ることを祈っております。



各地からの報告

シンポジウム 秋吉台の赤土のひみつ 参加報告

(横田潤一郎：大阪府在住／ネットワーク理事)

草原の生きものを支えているのは“土”です。関東では黒い土、関西では茶色の土をイメージされる方が多いということですが、秋吉台の土は“赤い”色をしています。その赤土の魅力にせまるシンポジウムが、2019年12月15日に秋吉台で開催されました。土は、その土地の気候や地形のほか、人間活動の影響を受けながら、母材となる岩石などと生物由来の有機物が混ざり合って作られます。秋吉台は石灰岩台地で有名ですが、その赤土はどうやってできたのでしょうか。

■秋吉台の土はどんな色？どんな性質？山口大学 柳助教

秋吉台の土を調べると、石灰の性質をあまり持っていないことが明らかになってきました。石灰はアルカリ性でカルシウムを豊富に含みますが、秋吉台の土は強い酸性でカルシウムが少量。また、石灰が砕けた土だとすると、岩石に近い地下の土が荒く、地表面に近づくほど細くなるはずですが、秋吉台の土はその逆でした。これは、秋吉台の土が岩石の風化でできた土ではなく、堆積土壌の特徴を示すようで、大陸からやってきた黄砂が堆積したのではないかと考えられるそうです。ただ、秋吉台の土が赤い理由は正確に説明できないので、さらに研究を進

めるそうです。

■秋吉台の土は何でできている？秋吉台の歴史と土のかかわり：森林総合研究所 岡本グループ長

古地図や古文書からかつての土について調べると、場所によって赤い土だけでなく、黒や紫といった色で認識されていました。秋吉台上の土は「紫真土」という記録があり、砂や小石が混じらない最上の土だったようです。その土には、日本各地の土に含まれている石英と同じものが含まれますが、その石英は黄砂と同時期にできたものということが分かってきました。また、火山灰由来の火山ガラスも混ざっています。火山の噴火した年代から、過去数万年で1～2mの火山灰と黄砂が積もった可能性があり、それは秋吉台の土の厚さと概ね一致するそうです。

■秋吉台の土が支える生物多様性：九州大学 平舘教授

土は、植物にとっても重要です。秋吉台には、特有の草花が多数生育していますが、外来植物が繁茂する場所もあります。その場所の土は、土壌のpHが高く、植物が使えるリンが多いことが分かりました。在来種は酸性で貧栄養の土に耐性があるのに対し、外来種は富栄養の土を好む傾向があるようです。

このような土はかつて畑だった場所にあり、肥料がたくさん供給されたことで外来植物がすみやすい土地になってしまいました。秋吉台のプロジェクトでは、刈草を持ち出すことで、だんだんと在来種に適した土壌が戻ってくるのが分かっています。

■炭からわかる山焼きの歴史 秋吉台と他地域を比べると？：京都精華大学 小椋教授

秋吉台では毎年、山焼きが行われています。山焼きでできた炭は壊れにくく、土の中に残ります。例えば、阿蘇ではその炭が出てくる土の層から、過去数千年～1 万年以上も前から山焼きが行われてきたことが分かっています。秋吉台の土からも、草が燃えてできた炭が出てくることから、秋吉台でも過去8000年前には草原があり、山焼きがあったと思われます。ただ、阿蘇と比べると、炭の量は圧倒的に少ないとのことで、さらなる研究が必要だということです。

まだまだ謎の多い秋吉台の赤土ですが、その材料が空を飛んでやってきたかも、という、まさに塵も



積もればというお話しに新鮮な驚きを感じました。そして、生きものにとって重要な土が、数千年にわたる生物や人の営みを受けてできた、かけがえないものであることがよく理解できました。

シンポジウムには、地元の方を始め遠方からも計82名の参加者があり、急遽座席が追加されるほど、盛況な会となりました。講演の休憩時間やシンポジウム後の意見交換会では、展示物の土や土壌標本などを囲んで質問するなど、議論があちこちで起こっており、活気のあるシンポジウムでした。

「茅刈り体験・茅葺き職人によるワークショップ」に参加しました
(ネットワーク事務局)

島根県の出雲地方でも茅葺きの家が残っていますが、カヤが入手しにくかったり、茅葺き職人が少なかったりして、茅葺きの文化の継承が難しくなっています。茅葺き文化を後生に残すことを目的に、茅刈り体験と茅葺き職人によるワークショップが催されましたので、参加しました。

茅刈り体験では、約20名の参加者とともに、雲南市内の河川敷に生えるカヤを刈りました。県内在住の茅葺き職人から、刈り方、カヤの選別の仕方、束のまとめ方などのレクチャーを受け、茅刈りを行いました。河川敷のため、オギという種類が刈り取りの対象でした。火入れなどは行われていないため、古いものが残っており、選別は若干大変でした。丈の高いものからやや低いものまでありますが、カヤの長さによって用途があるとの話しも聞きました。午前中2時間ほどの作業をして、トラックの荷台がほぼ一杯になるくらいのカヤを刈り取ることができました。

午後からは、茅葺き職人の方から、茅葺きの手順について、この5年くらいの間で携わった屋根の葺

き替えの様子をみながら、説明を受けました。屋根に葺かれたカヤを切るためのハサミなども見せてもらうこともできました。

今年の夏ごろには、納屋の屋根をカヤに葺き替えるワークショップが行われる計画であり、それに用いられるそうです。

地域のカヤが使われて、茅葺き文化が伝承されることが少しずつでも広がることで、茅場や草原の保全につながることを期待できた体験でした。



草原をめぐる動き (2020年1月～2020年4月)

- 1/4 自然観察交流会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 1/15 田島ヶ原サクソウ自生地の草焼き (場所: 埼玉県さいたま市桜区 桜草公園内「田島ヶ原サクソウ自生地」、連絡先: さいたま市教育委員会文化財保護課)
- 1/26 乙女高原フォーラム～草原を守れば、つながり復活?!～ (場所: 山梨県山梨市 山梨市民会館、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 1/19 阿蘇野焼き支援活動入門セミナー2019 in 福岡 (場所: 福岡県福岡市 アクロス福岡、連絡先: 公益法人阿蘇グリーンストック) 2/1 にも開催
- 1/25 流域連携活動「小貝川の野焼き」(場所: 茨城県常総市小貝川河川敷、連絡先: 森林塾青水)
- 1/25 若草山山焼き (場所: 奈良県奈良市奈良公園内若草山一帯、連絡先: 奈良市観光センター)
- 1/25 本州最南端の火祭り (場所: 和歌山県東牟婁郡串本町潮岬望楼の芝、連絡先: 串本町観光協会)
- 1/26 野焼き支援ボランティア初心者研修 (第1回) (場所: 熊本県阿蘇市 阿蘇草原保全センター「草原学習館」、連絡先: 公益法人阿蘇グリーンストック) 2/8、2/11 にも開催
- 1/26 流域連携活動「菅生沼の野焼き」(場所: 茨城県坂東市菅生沼、連絡先: 森林塾青水)
- 2/1 自然観察交流会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 2/2 川内峠野焼き (場所: 長崎県平戸市川内峠、連絡先: 平戸市観光課)
- 2/8 茅の秘密基地と草原の生きもの (場所: 兵庫県三木市 三木山森林公園、連絡先: 三木山森林公園管理事務所)
- 2/9 大室山山焼き (場所: 静岡県伊東市大室山、連絡先: 大室山リフト)
- 2月上旬 都井岬の野焼き (場所: 宮崎市串間市都井岬、連絡先: 都井岬ビジターセンター)
- 2/16 秋吉台山焼き (場所: 山口県美祢市秋吉台、連絡先: 秋吉台山焼き対策協議会 (美祢市農林課))
- 2/22 平尾台野焼き (場所: 福岡県北九州市平尾台、連絡先: 平尾台自然の郷)
- 3/7 自然観察交流会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 3/7 ヨシ焼き (場所: 山口県山口市阿知須きらら浜自然観察公園、連絡先: きらら浜自然観察公園)
- 3/7-8 キャンドルナイト・雪原トレッキング (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 3/8 追加の山焼き (草刈り・火入れ) (場所: 山口県美祢市秋吉台、連絡先: 秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局)
- 3月中旬 生石高原山焼き (場所: 和歌山県有田郡有田川町・紀美野町、連絡先: 紀美野町役場産業課)
- 3月中旬 飯田高原野焼き (場所: 大分県玖珠郡九重町、連絡先: 飯田高原野焼き実行委員会)
- 3/21 渡良瀬遊水地ヨシ焼き (場所: 渡良瀬遊水池、連絡先: 渡良瀬遊水地ヨシ焼き連絡会)
- 3月下旬 三瓶山西の原火入れ (場所: 島根県大田市三瓶山、連絡先: 大田市役所)
- 4月上旬 塩塚高原野焼き (場所: 愛媛県四国中央市・徳島県三好市、連絡先: 四国中央市観光協会・三好市役所)
- 4月上旬 扇山火まつり (場所: 大分県別府市扇山、連絡先: 別府八湯まつり実行委員会)
- 4月中旬 雲月山の山焼き (場所: 広島県北広島町、連絡先: 西中国山地自然史研究会)

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 41 2020年1月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】冒頭の会長のあいさつにもありますが、本年は草原サミット・シンポジウムが開催され、「草原100選」も動き始めます。みなさまの協力のもと、草原の大切さが見直される年になることを期待しています。